



手稲郷土史研究会の基本理念を忘れずに…

手稲郷土史研究会 会長 永井道允

手稲で育つ子どもたちにとっては、「手稲がふるさと」です。「ふるさとていねを知り」、「ふるさとていねを愛し」、「ふるさとていねに誇りを持つ」、そんな子どもに育ててもらいたいと願っています。このことは、手稲に住む大人たちの共通の願いであります。

手稲区連合町内会連絡協議会（区連協）と手を携えて「手稲郷土資料館の建設」の機運を高めようと、手稲郷土史研究会が誕生したのは平成 17 年 9 月でした。平成 18 年 3 月には札幌市に資料館の設置を要請するため、「手稲郷土資料館設置期成会」を立ち上げましたが、うまく進まず、同 24 年には期成会の活動を休止しました。その後も郷土史研究会が区連協などに働きかけるも、残念ながら進展は見られず、今日に至っています。

「手稲に郷土資料館を！」は、私ども郷土史研究会の基本理念であり、旗じるしです。現在は、我々の片思いのような関係にある区連協ではありますが、地域のリーダーの皆さんの集合体です。大きな力を持っており、大事なパートナーとして考えています。いつの日かまた手を携えて、手稲区の支援もいただきながら、手稲に「郷土資料館」が実現することを夢見ています。

（平成 31 年 4 月 10 日「懇親会」挨拶より）



手稲区内の小学校所蔵の郷土資料
（手稲区 HP より転載）

令和元年度 定例会 研究発表予定表

開催日	内容	講師	備考
5月8日(水)	『富丘・西宮の沢時間旅行』の編集に携わって	赤坂登夫氏	元 手稲中央小学校 校長
6月12日(水)	稲穂で発見された古文書	一ノ宮博昭	手稲郷土史研究会 会員
7月10日(水)	手稲の交通史	田中和夫氏	文筆家
8月14日(水)	「藤の湯」創業百年 — さっぽろ銭湯物語	塚田敏信氏	まち文化研究所 主宰
9月11日(水)	手稲鉱山の変遷	林 俊一	手稲郷土史研究会 会員
10月9日(水)	国体に行った手稲町役場野球チーム	菱輪隆宏氏	木の実歯科 院長
11月13日(水)	手稲山の生い立ち	松田義章氏	北海道総合地質学研究センター 理事
12月11日(水)	前田の歴史 拾い読み	永井道允	手稲郷土史研究会 会員
1月8日(水)	道道 手稲石狩線の歴史	立花邦雄	手稲郷土史研究会 会員
2月12日(水)	手稲開基となった仙台藩白石支城の入植	村元健治	手稲郷土史研究会 会員
3月11日(水)	手稲町の火事	沖田紘昭	手稲郷土史研究会 会員

* 各回 午後 6 時 15 分より、会場は いずれも手稲区民センター 3 階 視聴堂室です。



定期総会風景

★「定期総会」および「臨時総会」ご報告 4月10日、手稲郷土史研究会の『定期総会』を手稲区民センター第1・2会議室で開催しました。平成30年度事業報告・同決算報告・同会計監査報告の各議案については承認されましたが、新年度の計画案ほかは時間の都合上、『臨時総会』に持ち越すこととなり、4月16日、手稲コミュニティセンター 第1会議室において開会。審議の結果、平成31（令和元）年度事業計画・同予算計画・役員選任の3議案が承認され、「会則改定案」は継続して検討のうえ次年度

以降に改めて諮られることが決まりました。なお、当研究会の年会費について、今年度より3,000円に引き上げることが『臨時総会』で可決されましたので、併せてご報告します。

★「懇親会」を和やかに開催 4月10日、手稲区民センター 第1・2会議室にて、手稲区市民部長 宗万正樹氏、同 地域振興課長 吉田裕亮氏、手稲区連合町内会連絡協議会 副会長 丹井田和義氏をお迎えし、手稲郷土史研究会の『懇親会』を行いました。区との協働による「ふるさと手稲歴史発見事業」について確認し合ったり、歴史談議に花を咲かせたり、和やかなひとときを過ごしました。

★手稲郷土史研究会の分科会へのお誘い 手稲郷土史研究会では、より専門的なテーマについて学び合おうと、今年度は四つの研究グループが活動しています。①北海道造林研究会（代表：沖田弘昭会員）⇒『北海道造林合資会社物語』を発刊予定。②手稲石の会（代表：一ノ宮博昭会員）⇒視察旅行、「手稲鉦山」・「手稲石」の副読本の発行など。③新川運河部会（代表：渡部孝次会員）⇒「新川フットパス」を7月に実施予定。④ホシボキの会（代表：村元健治会員）⇒星置地域の歴史調査および成果発表など。興味をお持ちの方は、定例会などで各分科会の代表までお問い合わせください。

遺構・遺物は語る

泥炭

手稲は、アイヌ語の「濡れているところ」を意味する「ティネ・イ」という言葉に象徴されるように、湿地・泥炭地が多いところとしてよく知られる。

かつては、前田、新発寒を中心に星置地区などは泥炭地に広く覆われていて、開拓に入った住民たちを苦しめた。何とかそれらを沃野に改良しようと、土功排水の開削をはじめ客土の投入なども積極的に行われた。そうした先人たちの血のにじむような努力のお蔭で、あれほど農民を苦しめた泥炭地も、次第に姿を消していった。

また、野火もしくは火の不始末等により泥炭に火がついて何カ月も燃え続けたというようなことも過去にはしばしばあり、これは手稲の歴史を語るうえで忘れることのできないものだった。様々なエピソードがある泥炭だが、実際に目にするのは、今やほとんどない。

そのような中で、昔の泥炭地の姿をкаろうじて残すと思われる貴重な場所がある。下手稲通の星置川にかかる「星函橋」北東側の山口地区の一画で、写真のように、ヨシがびっしり生えている。泥炭は、これらが枯れて長年堆積したものであるとされ、このヨシ原の下にも、おそらく泥炭が堆積されているだろう。が、とにかく、あれほど多かった泥炭地を偲ぶ光景はおおかたなくなってしまう、一抹の寂しさを感じる。

村元健治（手稲郷土史研究会 会員）



泥炭地を偲ばすヨシ原